

全全區順慶四丁目四六

木村 貞一

全全鍛冶屋町二三九

佐山 鐵三

以 上

寄 書

日本水彩畫會大阪支部寫生行

大阪 大隅 直造

三月一日、日本水彩畫會大阪支部の第一回寫生行は、阪神電軌沿線佃附近に開かれた。當日は幸に好晴にして、寫生日和とても云ふべきか、天は吾等の舉を賛したのであらう。午前七時半梅田に會員中の有志一同集合なし、同五十分電車に打乗りて出發す。間もなく、大和田に着し、こゝに下車なして徒歩佃に向ふ。途中には見るべき畫題も多くありて、足を止むる事も屢々なりしも、總て午後割愛なして、程なく目的地なる佃に達す、鐵橋を越えて小川のほとりにSK、KY、SSの諸君と僕とは三脚をすへた、無言にて筆を運ばす事約二時間、一同寫生を終り、SK君の批評及注意等あり。それより、晝食を喫して大和田の森を寫生に行く。MO君は何處に行かれしか、數度呼べども答へもなし、かれて約束もあれば其儘に行きて、適當の場所に腰を下して森の輪廓の漸く終りし頃、さしもに晴れし空は、いつか雨雲に掩はれて、果ては雨さへ降り初め、一同の口より思はず残念の一聲は洩れた、然し幸にして後方土堤下に新築中の家ありしかば、直ちにその中に入りて、引續き寫生をなす。

時雨と思ひし雨は、漸やく降りつゝのりて今は致し方もなく、遂に中止となり森の圖の終ると共にOM君と歸り來られしかば、打揃ひて歸路に就く。斯くの如く第一回は不成功に終りしも、近日第二回舉行の議あり、當市附近の同好者諸君、來りて僕等と行を共にせずや。

面 影

和歌浦 不 圖

檜の梢をよする寒風がどう／＼と、大波でも寄すなかの様な音のする日は實に寒い。日曜には至つてこんな片輪な日が多い。今日も矢張り片輪の域を脱することの出来ない程寒い日和だ。吾が輩は別にこんな日を好んだ譯でも撰擇した譯でもないが、不斷ずばらな男は、何の因果かこんな日に巡り遇ふことが珍らしくもなければ別に取り立てて不思議がる暇もないからカバンを肩に郊外に出た。

探し廻つて居ると小さな丘が大きな山に捨てられた様に、田圃の中に獨り座はつて居る。中腹から上は若松が並んで、天氣の都合でホワイトを多く含んだ綠色を示して居る。下は黄色を多分に有つた枯草が奇麗に包んで居る。一寸ものに成り相だから始めることにした。

輪廓を終る迄は、歩行した勢で稍我慢も出來たが、着色にかかつた頃は、足の爪先から手先と言つた順序に小振動を始め、遂に全身に及んで來た。「既に我が事止ぬる哉」と言ふ文句は恐らくこんな場合に間に合ふ逃げ道で、墮落に進む一里塚だ。進む

ことを知つて退くことを知らぬ青年は矢鱈に使用したがるもので、失敗の時でも、失意の時でも、叱られた時でも、忍耐力の續かぬ時でも、殆んど口癖の様だ。今しも例の文句を捻りつゝ筆を投げ入れんとして、カバンの隔板を引き明けた。後の方で「駄目だ駄目だ」と言ふ聲がある。確かに覚えのある聲で、何でも鎌倉講習の際、江の島行の電車がこみあつたから一行の者我れ先にと争を始めた事があつた。するとおもむろに、「年の順か、身長順か、色の黒い順か、此の三の中で選まう」と言はれた人があつた。今聞いた聲は此の人に其の儘であるから振り返りて見ると間違もなく大下先生である。不思議と言ふよりは寧ろ驚いた。あはてざまに筆を振つていきなり始めた。すると先生が怒るに教えて呉れる、「君の繪の色は乾燥する。此の水は何だかひと割れ相だ。畫面をこする形蹟が見える、どうも宜しくないと乾くからこんな癖は早く捨てよ。關西の男が繪筆を嘗める傾があつてよくない。多く自然を見て少く描け。時時眼を他に移せ、若しさうでない、最初の感じを最後迄持續する事が出来ない。全體を見て局部を見るな。光線の府を見附けぬから調子が整はぬ。小刀細工は調子に負傷させる。自然物には單純な色がない、松葉や草の緑は繪の具の緑其の儘で出ると思つたら間違だ。其處をごまかしたから自然の感じを夫つた。其處は講義録を暗記して居て色を使つたから自然物と違つた。自分の頭で色を製造してはならぬ。もつと忠實に寫せ。汗水で溶いた繪具

で描いた夏の景は活動して居る。氷を割つて描いた雪の景には生命がある。彌次られおほせば彌次られぬ畫が出来る。笑はれ盡せば笑はれぬ畫が出来る。失敗だと思つても中途で止めてはならぬ、最後迄やり通せ」と連發される詞に勵まされ、約三時間の後には大體纏りが着いた。調子の修正も出来た。尙ほ御指導のあることと思つて、待つて居たが何も無い。不思議なるかなと顧みれば、彌太君の一人も居ない。唯だ膚をつんざく烈風はなやみも無く襲來して居る。全身急に小振動を始めた。あゝ夢であつたかと思つて、つぶやきながら筆を投げ入れると、その底から手札形の紙に「日本水彩畫會々員」と記した守りが現れた。是れは去る鎌倉講習の際、要塞地帯内で若し咎めを受けた時辯解の證として貰つたのである。何も田舎の彌次を威す野心もないのだが、其の後先生の名代として箱を放した事がない。若し此の札に眼が觸れると、以前の如き感想がむらゝと湧いて來て、ごまかすなどは絶對的に出来なくなるのは常である。あゝ畫に志のある輩は必ず一度は講習に行くべしだと思ひつゝ畫板を擔いで、歸る時の愉快さは、又格別のもので恐らく此の道樂を有たぬ人には解るまいと思ふ。

春光

畔

川

塔の影うら／＼と草つみにけり
十二橋水のまにまに草をつむ